



[令和 5 年 3 月 8 日 定例会発表要旨]

## 『北海道造林合資会社物語』外伝～近藤家の家系図

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭

手稲山の 緑豊かな今日の山容の礎を築いたのは、明治 31 年に設立された「北海道造林合資会社」だった。開拓期の過度な伐採や山火事で荒廃した手稲山の森林資源の保護を訴え、軽川をはじめとする苗圃でカラマツ、トドマツ、シラカバ、オニグルミ、ドイツウヒなどを養木。手稲山に植樹された木々は困難を克服しつつ根付き、大正期には成果が表れるようになった。その後も 造林事業は続けられたが、同社の所有林は 昭和 12 年頃から、王子造林株式会社などへと移譲される。



拙書『北海道造林合資会社物語～手稲に咲いた明治の大輪』の出版から五年目を迎えようとしているが、この間、同社で経営の中心的な役割を果たした 近藤新太郎翁※ ゆかりの方たちが名乗りを上げられ、家系の全体像を把握できたことは望外の幸せだった。ご縁が繋がり、このたび、新太郎翁の

ご長男 安彦氏の孫にあたる 近藤 覺氏のご尽力により『ふるさとの町 軽川～近藤家の系図』が発行された。新太郎翁の片腕として生涯を共にした 安彦氏の日常や 父親への尊敬の念、新太郎翁の妻 梅子さんが陰に陽にいかにか夫を支えたか、また、安彦氏の兄弟姉妹の孫にあたる方たちもそれぞれの思い出を紡がれている。私も求められ、「近藤安彦翁 小伝」を書中にしたためた。

※近藤新太郎：慶応元年、京都府出身。代用教員などを経て明治 26 年に北海道へ移住、道庁勤務となる。明治 31 年、道庁林務部を退職し 植物学者で技師の田中壤とともに 北海道造林合資会社の設立に参加。昭和 13 年没。



令和 4 年 7 月発行  
『ふるさとの町 軽川  
近藤家の系図』

「近藤安彦翁 小伝」より… 安彦氏は明治 23 年、京都府丹波国船井郡世木村生まれ。同 27 年に札幌へ転居し 創成尋常小学校（のちの西創成小学校→資生館小学校）入学、北海中



昭和 35 年撮影  
近藤安彦氏  
(『近藤家の系図』より)

学校（現 北海高校）から東京専門学校（のちの早稲田大学）文学部を卒業。北海道造林合資会社の仕事は何でもこなし、事業地の案内や公園の植樹設計など、ときには父 近藤新太郎翁の代理として活躍した。また、軽川郵便局の 3 代目局長でもあった父の跡を継ぎ、4 代目 軽川郵便局長（大正 2 年 10 月～昭和 9 年 3 月）として勤務。退職後は 北九州や山口の鉢山への投資事業などに関わったが、新太郎翁の逝去後は昭和 14 年から 17 年 12 月まで、手稲村役場にて学事・兵事係に就く。多くの若者を戦地へ送る仕事は、さぞかし心労を重ねたことだろう。

昭和 25 年頃には北海道を離れ、ほぼ 30 年間に郷里の京都で過ごす。持ち前の好奇心は、京都のすべてが満たしてくれた。安彦氏と妻 千代子さんには 7 人の子があったが、京都転居のきっかけを作ったのは次男の武夫氏だった。武夫氏は 阪神競馬界にジョッキー候補生として入門、なんと昭和 24 年の「日本ダービー」で大映の永田雅一社長の持ち馬 タチカゼに乗り優勝してしまった。しかし、その後、障害レースで不慮の事故に遭い 37 歳の若さで死去。戦争で子を失うことはなかったが、まさか事故で亡くすとは、近藤安彦家 最大の悲劇であり、傷心の帰郷となった。武夫氏は誰にも好かれる人柄だったこともあり、競馬界こそっての恩情がご夫妻を癒してくれたという。お二人は最晩年、札幌のご長男 達彦氏のもとへ移られ、安彦氏は昭和 60 年 1 月、94 歳で逝去された。

**近藤商会のことなど…** 近藤新太郎 翁の事業の始末と近藤家本家の営みは、翁亡きあと、ほぼ安彦氏に委ねられていたが、やがて夫妻は京都へ戻ることとなる。そこに新しく近藤家を支える人物が現れる。新太郎翁の四男 復三郎氏と、翁の後妻 理久さんである。

復三郎氏は大正 13 年、粘土板の販売代理店として、北海道庁北門前に「近藤商会」を創業する（のちに合資会社→株式会社）。粘土板はやがて謄写版となり、すぐに総合事務機器を扱い、各事業所や組合、学校などへの販売で急成長していく。この会社では、復三郎氏の子息 博氏や 兄の亮二郎氏、甥の尚夫氏など、多くの近藤家有縁の人々が働いている。さらに事業拡大で函館に進出するが、復三郎氏から 函館近藤商会の社長を引き継いだのが、新太郎翁の後妻 理久さんの次男で 池見家へ養子に入られた 厚氏であった（近藤商会函館出張所を分離し 株式会社近藤商会とする）。

近藤新太郎 翁は、大正 5 年に妻の梅子さんを亡くしてから、姻戚の理久さんと再婚していた。翁との間に鶴子さんと寿美子さんをもうけたが、この二人の父親代わりを務めていたのも、復三郎氏だった。寿美子さんは、池見家の長女 イチさんと 3 代目 深瀬鴻堂氏の長男である鴻一郎氏と結婚し、函館に一大医者家族群を誕生させる。ちなみに、初代 深瀬鴻堂はコレラの予防対策と施療で、その兄の洋春は天然痘の種痘の術で知られる 幕末から明治期に活躍した蘭方医である。

近藤家の家系図を見ていると、決して誇張でなく、人類の発展の様子がよくわかる。この大きな集団を支えたのは、もちろん律儀に働く近藤家の人々であるが、同時に その後ろには、豊かさを提供してくれる手稲山と、そこを舞台に繰り上げられた北海道造林合資会社の堅実な経営を指摘すべきであると思うが、いかがであろう。



大正 11 年撮影「公爵 徳川家達閣下 所有林御視察」  
（中央が家達閣下・その後ろが新太郎・左端が安彦）  
〈近藤家の系図〉より

**追記：経営者のふるさとを訪ねて…** 昨年 6 月、北海道造林合資会社の経営に参画した 3 名の故郷を訪ね、拙書『北海道造林合資会社物語～手稲に咲いた明治の大輪』を寄贈させていただいた。



出石明治館 〈同館 HP より〉

兵庫県豊岡市出石町⇒森林植物学者 田中 壤（安政 5 年—明治 36 年）は 明治 31 年に 近藤新太郎とともに北海道造林合資会社を設立、育苗・造林事業に着手した。そのふるさと 出石藩は“皿そばの町”で 40 軒ほどの蕎麦店が 小さな城下町にひしめいている。博物館「出石明治館」には、日本各地の森林植物帯調査をまとめた 田中壤、天気予報を創始した桜井勉、東京大学初代学長 加藤弘之らの銅板肖像画が収められていた。

新潟県長岡市⇒笠原格一（嘉永 5 年—明治 43 年）は、郷里で富裕な呉服卸商兼洋系卸売業を営んでいたが、開拓会社「北越殖民社」の幹部として拠点を北海道に移す。明治 20 年代には 道庁から官営の味噌醤油製造所の払い下げを受けて「篠路醤油屋」を開業、北海道造林合資会社にも参加する。札幌区区議員でもあった。長岡市は、山本五十六や河合継之助のふるさとであり、この二人の特別記念館が建っている。なお、笠原格一、関矢孫左衛門らが参画した北越殖民社は、戊辰戦争に敗れ 壊滅寸前の旧長岡藩 藩士の授産の道に奔走した 三島徳二郎によって 創設された。

京都府南丹市日吉町世木⇒近藤新太郎のふるすとは、夏は鮎の里、秋から春までは筏と干把（薪のこと）の産地だった。いずれも京都人の生活には欠かせないものだ。「南丹市日吉町郷土資料館」では、筏の作り方が詳細に展示され、鮎をこよなく愛した食通 北大路魯山人も紹介されている。

次回例会 ⇒ 5 月 10 日（水）18：15～ / 手稲区民センター 3 階 視聴覚室 / 「ふれてみよう アイヌ文化とその歴史」をテーマに学習の予定です。※総会議案書をご参照願います。 なお、会員でない方のご参加は 申し込みが必要です。



▶ 道内随一の車両基地…

昭和 40（1965）年 9 月、「日本国有鉄道 札幌運転区」が現在の曙 1 条 3 丁目に開設されました。北海道の鉄道輸送は、明治 13（1880）年の「官営幌内鉄道」の開通以来、近代化が進められ、昭和 30 年代後半の高度成長期には、札幌を拠点とした主要幹線が都市や観光地へのアクセスを中心に 着実な伸びを示すようになっていきます。そこで列車運転と車両整備の“核”となるべく設けられたのが札幌運転区で、車両数 62 でスタート。その後、順次 拡張され、昭和 55（1980）年にほぼ現在の規模になりました。

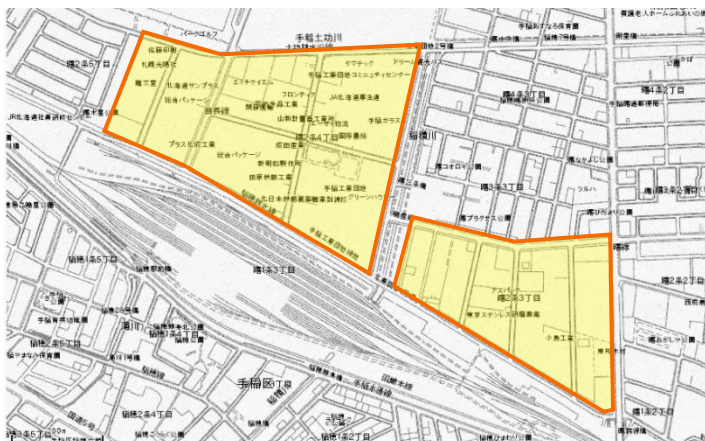
昭和 62（1987）年、国鉄は 115 年の歴史に幕を下ろし、札幌運転区は「北海道旅客鉄道株式会社 札幌運転所」として事業を継承しました。“確かな技術と安全で鉄道の未来を築く”をモットーに車両数 460 超、札幌圏を中心に道内の全輸送力の 70%を占める車両基地として今日に至ります。



昭和 40 年撮影 国鉄札幌運転区 初列車出発式  
 〈JR 北海道札幌運転所 提供写真〉



現在の札幌運転所  
 〈JR 北海道札幌運転所 提供写真〉



札幌手稲工業団地

〈札幌市地図情報サービス 掲載地図より抜粋 彩色加筆〉

業、機械加工業、プラスチック加工業、家具製造業、紙器製造業、鉄筋業、製材業など さまざまな業種の約 50 社が、周辺の住環境に配慮した工場運営に取り組み、地域経済の担い手として経営にあたっています。

▶ 大規模住宅団地の建設…

札幌市との合併を控えて、手稲では大規模な宅地開発が次々と進められました。

昭和 41（1966）年から建設が始まった「山口団地」もその一つで、10 数年後には 1,800 余戸が住むようになります。道路が整備されてバスも走り、小学校や公設市場なども備わって、一大住宅団地が形成されていきました。

〔編責:広報部〕



昭和 44 年撮影 市営山口団地  
 〈札幌市公文書館 所蔵〉

\*参考文献：札幌市『手稲町誌』（下）、手稲連合町内会連絡協議会・手稲鉄北連合町内会連絡協議会『手稲開基 110 年誌 手稲の今昔』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、同『手稲区ガイド』、同『手稲区歴史ガイドマップ』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』、同「会報 郷土史ていね」第 167 号、札幌手稲工業団地ホームページ、ほか。

## ▶手稲でいちばん新しいまち…

平成 15 (2003) 年に始まった「札幌市手稲山口土地区画整理事業」、および同 17 (2005) 年開始の「札幌市手稲曙西土地区画整理事業」によって宅地開発され、平成 19 (2007) 年 10 月に誕生した手稲で最も新しい行政地区です。「手稲山の風に乗れ、明日に向かって飛躍するまちに…」との希望を託して「明日風」と名付けられました。

幹線道路に隣接し、商業施設なども進出。若い世代が多く暮らす“ニュータウン”にふさわしい活気あるまちづくりが進んでいます。

## ▶市民参画型の公園づくり…

明日風 2 丁目に位置する 広さ約 4.7ha の「明日風公園」は、手稲の山並みを一望できるまさに地域のシン



明日風公園 (札幌市公園緑化協会 所蔵)



平成 18 年撮影 ワークショップ  
(北海道造園設計株式会社 所蔵)

ボリ的な存在です。土地区画整理事業により平成 17 (2005) 年に基盤整備が行われ、同 22 (2010) 年、完成式を迎えたこの公園には、“市民参画型”でつくられたという大きな特徴があります。平成 18 (2006) 年、地元の北海道工業大学(現 北海道科学大学)の環境計画ゼミとの協働で地域住民から意見やアイデアを聴くワークショップが開かれ、周辺施設へのヒアリング調査を経て計画立案。手稲の自然景観と歴史的要素を設計コンセプトに取り入れ、4 年がかりで造成しました。この間、公園の名称は当初予定の「曙西公園」から地区名と同じ「明日風公園」へと変更されています。

園内にはさまざまな年齢に対応するカラフルな遊具が備えられ、夏は徒渉池での水遊び、冬は歩くスキーや築山でのそり滑りと、四季を通じて楽しめます。またテニスコートやパークゴルフ場も設けられ、幅広い世代が集える空間となりました。

## ▶治水対策に欠かせない「雨水貯留池」…

河川流域で宅地開発など都市化が進むと、雑木林や農地だったときには地面に浸透したりくぼ地に溜まっていたりした雨水が、道路の排水溝や下水道をつたって直接、川へ流れ込むようになります。大雨のときには、浸水被害も周辺へもたらしかねません。その対策として設置されているのが「雨水貯留池」で、明日風地区には「東濁川」沿いに 3カ所あります。土地がもともと持っていた保水力や遊水機能を補い、住民を守るための重要な施設です。 [編責：広報部]

\*参考文献：札幌市手稲区『手稲区ガイド』、関秀志『札幌の地名がわかる本』、札幌市都市局「札幌の区画整理の実績」、札幌市デジタル戦略推進局「新規町名整備・住居表示実施地区一覧」、札幌市下水道河川局「都市開発と河川」、札幌市公園緑化協会「明日風公園 手稲区のニュータウン」、北海道造園設計株式会社 提供資料、ほか。

手稲郷土史研究会の連絡先が 5 月 1 日より、〒006-0818 札幌市手稲区前田 8 条 11 丁目 4-5 FAX 011-682-9874 (事務局長：林 俊一 方) へ変更となります。併せて、下記のメールアドレスも閉じられますので、ご注意ください。